

保田紙

徳川御三家の一つ紀州徳川の初代藩主 徳川頼宣公がお国入りしたのは元和五年（一六一九年）。領内に「三白」と言われる重要な産物、米・塩・紙のうち、製紙が無かったためこの復興を指示しました。この命を受けたのが、山保田の笠松左太夫です。依頼を受けた左太夫は、紙すきの盛んな地へ技術を教わりに行きましたが、どこへ行っても教えてもらえないどころか、見学もさせてもらえませんでした。村に帰った左太夫は、思案の末、一つの名案を考えました。それは、美男三人を商人に仕立て、紙すきの盛んな地へ送り込むことでした。選ばれた三人は、ともによく働きた土地の人にも信頼され、そのうちに次々と、紙のすけるきれいなお嫁さんを連れて帰ってきました。

準備も整い紙すきを始めますが、最初は気候や土質が違うせいか良い紙がすけませんでした。しかし、工夫を重ね苦労した結果、ようやく紙をすくことに成功したのです。さっそく殿様に献上したところたいへんなお喜びで、褒美を与えられました。

その後、左太夫は村人に紙すきを広め、最盛期の昭和二〇年代には四〇口軒もの紙すき屋があったと言われています。当時の保田紙は和傘に使われたので、地元では傘紙とも言われていました。水害や洋傘に圧され、昭和四〇年代には廃絶の危機に瀕しましたが、高齢者生産活動センターの設立で昭和五四年に復興し、平成二四年からは当工房にて継承に努めています。



紀伊國名所圖會



① 紙漉き

この工房で作っているわら細工の『わら』と保田紙の『紙』から『わらし』と名づけました。当工房でふるさとを体験し、童子に返って楽しんでください。



② 寒晒し

①昔ながらの漉き方を受け継いでいます。
②楮の収穫にあわせ1月～2月に集中して原料づくりを行います。



③



④ ぞうりづくり



③④熟練者でも1日に2足つくるのがやっと。
⑤しめ縄も作っています。

⑤ 大しめ縄づくり



⑥ むしろづくり

⑥農林産物を乾燥させたり、敷物として使われます。1畳分をつくるのに5日ほどかかります。

収穫したあとの稲わらも無駄なく使う農民の知恵。暮らしに欠かせなかった「わらじ」「ぞうり」「むしろ」や、お正月に飾る「しめ縄」も作っています。体験することもできます。